

●研究ノート

洪水と「退耕還林」 ——阿成文学に描かれた「生態建設事業」の実態

明治大学博士後期課程 劉 靈司馬

はじめに

21 世紀初頭、第十次五年計画の重点的事業の一つとして、中国政府は、農地の環境問題解決を目的とする生態建設事業に着手した。その中核に位置づけられたのは「退耕還林」という国家事業であり、これは、土壤流失の激しい地域の耕地を補助金と引き換えに森林化を促すといったものであった。また、各地域での「退耕還林」の成果を競い合わせる意味を込めて、2003 年より「全国環境優美郷鎮（後に「国家級生態郷鎮」に改名）」を、そして 2014 年からは、「全国美麗安居村莊／小鎮」と称するコンテストが実施された。受賞した鎮や村の名前は、地方誌や地方新聞にも大々的に取り上げられ、地域の発展にも繋がるため、その競争率もさきわめて高い。

本論が主題とする阿成文学の舞台もまた、2013 年以降、こうした環境事業の優良地域としてたびたび選定されている。具体的には、中国国内モンゴル自治区にある呼倫貝爾市、扎蘭屯市、そして、磨菇氣鎮^{フルンボイル ジャラントン モンゴルキ}などがそうであり⁽¹⁾、これらの地域は、2013 年の「国家級生態郷鎮」に選出⁽²⁾、また、2015 年にも「自治区級美麗安居小鎮」や「全国文明郷鎮」に選ばれ、さらには、磨菇氣鎮が推進する「美しい村建設」プロジェクトのモデル村であった野馬河村は、

2017 年の「全国美麗安居村莊」に選ばれることとなった。

さて、これらの地域のなかで、とりわけ着目したいのは、磨菇氣鎮である。というのも、阿成はこの磨菇氣鎮を通時的に三度にわたって描いており、その変容するプロセスを検証することは、部分的にはあれ、中国における生態建設事業の実態と、その影響を被った地方文化の実情を明らかにすることに繋がるからである。作品の刊行年は、1993 年、1998 年、2011 年というように数年間隔での発表となっており、さながら同地の文学的な定点観測の記録と呼ぶようなものになっている。磨菇氣鎮における「退耕還林」事業の実施は、もとをたどれば、2001 年の初め、磨菇氣鎮鎮長である呉玉臣が、国家からの優遇政策に一年先んじて、鎮政府として独自に、農民の「退耕還林」による農業税 30% カットを実施したことに端を発する。当時の磨菇氣鎮の現状については、以下のような記述がある。

百年近く前まで、磨菇氣鎮はまだ、山清水秀そのものだった。しかし、人々の過度な開墾と放牧によってその環境は破壊され、岩板は露出し、耕地は砂漠化し、作物の収穫も雨の量で左右されやすくなり、農民は作物で稼ぐどころか、損してばかりになった。鎮に所属する 70% の村が、基本的な生活水準を維持できなくなり、農民の

多くは耕地を放棄し出稼ぎに行った⁽³⁾。

このように、2001年の時点で環境破壊が原因で困窮を極めた磨菇気鎮は、政府からの優遇政策を受けつつ、その後十数年に渡って「生態立鎮」のスローガンを掲げ、鎮建設を重ねた結果、2013年には「国家級生態郷鎮」を、そして2017年には「全国美麗安居村莊」といった、一連の榮譽あるタイトルを獲得するに至った。このときのことを取材した記事では、現在の村の様子が以下のように報告されている。

村に入ると、美しい絵巻が目に入る——真っ平らなコンクリート公路、統一された風格の民家、特徴的な造形のソーラー街灯、山清水秀の狐島ウォーターランド……これはまさに、村が新たな農村建設や同心工程建設を大々的に推進することでもたらされた、大いなる変化である。リラックス出来る広場、緑溢れる憩いの場、便利なスーパーマーケット、村の至るところに活気が溢れている。憩いの場でのんびり過ごす老人たちは村の変化を見て、昔考えもしなかった日々が現実になったと語っている⁽⁴⁾。

もちろん、こうした「国家の政策によって、貧困にあえいでいた鎮が再び栄えた」という筋書きの物語は、磨菇気鎮のみのものではない。中国全土四万を越える「郷鎮」から、毎年百単位もの村や鎮が選出され、ここ十数年のあいだに、中国の各地の地方紙では、無数の「破壊と再生」の物語が記事になったのだ。その一つが、中国政府による「生態建設事業」の功績を称え、公式記録となっている。だがその一方で、「報喜不報憂（望ましいことばかり報道し、不都合なことは伏せておく）」という姿勢も、未

だに健在である。つまり、これらの報道に記録されているのは国家事業の「喜」の部分であり、隠された「憂」の部分については、後世から遡り調べあげることは非常に困難な作業となるのだ。その点、本論が以下にとりあげる阿成文学——とりわけ、彼の「磨菇気」をめぐる書き継がれた物語群は、今世紀の一大国家事業たる「生態建設事業」の本質を庶民の視点から批判的に記録した、きわめて有用な資料だと言える。

従って、以下では、「磨菇気（モンゴルキ）」、「川上拾遺（川沿いの物語）」、「後磨菇気時代（ポストモンゴルキ時代）」といった阿成の三作品を対象に、そこに浮かびあがる「退耕還林」を中心とした「生態建設事業」の実態を分析していく。このとき、特に注目したいのは、これらの国家事業が実施される前に同地域を襲った、「洪水」という災害の重要性である。阿成文学に描かれる磨菇気鎮内の磨菇気村⁽⁵⁾は、1998年の洪水で一度壊滅状態になり、その後、別の場所で村が再建された。そして、村が壊滅状態になった原因として、森林伐採による環境破壊のほか、鎮周辺の土壌流失を放任した中国政府の責任もあったはずだと、阿成は作中で訴えかけているのである。こうした阿成作品の提示する環境論的視座から磨菇気鎮の変遷を確認しつつ、最終的に本論では、文学的に表象された「生態建設事業」の実態と影響を明らかにしたい。

I 「磨菇気」三部作と阿成の作風

1948年生まれの阿成（本名・王阿成）は、1979年の作家デビュー以来、主に黒竜江省ハルビン市を舞台とする作品を数多く生み出してきた。黒竜江省作家協会副会長やハルビン作家

協会会長といった肩書の他に、文芸雑誌「小説林」の編集長を務める阿成は、中国東北地方を代表する作家として、フランス語、英語、ドイツ語、ロシア語、日本語⁽⁶⁾などで翻訳紹介されている。また、阿成作品においての東北地方とは、地理的に「東北三省」として区画化された遼寧省、吉林省、黒竜江省に留まらない。その代表作の一つである「胡天 胡地 胡騷」で強調された「胡」という字のように、阿成が語る「東北」には、古代中国の時代から北の地で生きる流罪にされた人や、遊牧民族を含む「流人」たちの内側に存在する、逞しくも荒々しい、ノスタルジックな「東北魂」という抽象的意義が根底にある。

「都市平民の代弁者」と呼ばれる彼の作品は⁽⁷⁾、短編や中編が圧倒的に多く、そのほとんどが社会の底辺に生きる人々の、積極的に日常を生きる様子を描くものだった。阿成は、短編集『哈爾賓故事（ハルビンの物語）』の序において、自作のことを以下のように語っている。

もともとこういう性分なのかも知れないが、私は常に、私の周りにいる取るに足らない人物たちに深い同情と理解を向けている。私の創作のほとんどはこういった人物をめぐるものだが、無論それは、私が現実を知り合った誰かをモデルにしているというわけではない。（中略）幸い、彼らのような小物たちの生活にも、度々愉快的な出来事が起こる。恋愛、婚姻、ひと稼ぎ、あるいは急にテレビに顔を出したり、宝くじが当たったり、ピクニックや魚釣りや、そういった実に素晴らしい、楽しい事柄だ。無論、どんなに私たちが愉快でいようと、それを見て鼻で笑う人々もいる。しかし、私は貧民小説家として、小説を使って彼らを

慰めなければならない。彼らを理解し、彼らに生活の美を見せ、どんなにささいな成果であろうと、それを誇りに思っ貰わなければならないのだ⁽⁸⁾。

このような阿成の創作スタイルは「磨菇気」三部作にもはっきりと表れている。まず、「磨菇気」は、1991年に起こった嫩江の洪水をモチーフとしているが、作中に登場する知識人三人（老阿——作家兼編集者、老常——編集者、老費——大学の美学の講師）は、チチハル市文化館の文学創作指導員である老邱に誘われ、チチハル市で小説創作講座をした後、市より水路で二時間ほど離れた磨菇気へ行くことにした。洪水が来る危険性が予報されていた磨菇気へ、敢えて水路で行くのは、万が一堤防が崩れた場合、船長が船で救援活動をするためであった。その後、一行は洪水の到着より先に磨菇気を訪れるも、洪水に備えるための堤防の補強を同行の船長と村人に任せ、四人は村の「取るに足らない」生活様式を体験することになる。こうして阿成は、三部作の第一作において、彼の得意とするスタイルによって磨菇気の景色と生活を描き、人々の純朴な民風を積極的に紹介することに集中するのである。

次に、第二作となる「川上拾遺」では、1998年に全国的な被害を及ぼした百五十年来と言われる大洪水がモチーフとなる。阿成は、磨菇気とのその周辺地域がこの大洪水の源となった原因を、同地での過度な森林伐採と、それを容認した中国政府の態度に求めようとする。同作においては、その創作技法そのものには際立った変化は見られないものの、創作動機に関しては、前作とは明らかに異なる点が見受けられた。その異質さとは、端的に、平民たちへ励ましや慰めの代わりに前景化された、作者本人の

怒りである。

最後に、第三作となる「後磨菇氣時代」は、第一作「磨菇氣」の十五年後を舞台とし、再び鎮を訪れた一行が、それぞれの十五年間を振り返りつつ、洪水が去り、変わり果てた鎮と、その現地人たちにまつわる十八のエピソードを紡いでいく。2011年発表の本作では、普通の人々にまつわる小さな物語を淡々と描くといった、第一作の創作スタイルへの回帰が見られるが、豊かになった鎮からは、かつての人情や純朴さが失われており、そのことに対する嘆きが作品の基調をなすこととなった。このように、阿成の「磨菇氣」に対する態度は、時代とともに変化していったのである。

II 洪水前夜の「磨菇氣」

阿成の中編小説「磨菇氣」が描いたのは、1991年に嫩江で起きた洪水が、磨菇氣鎮に到着せんとする前日の出来事である。史実として、1991年の中国では、全国十八の省や自治区を巻き込んだ大洪水の記録が残っている⁽⁹⁾。ただし、1991年の洪水でもっと被害が大きいのは華東地域の安徽省と江蘇省であり、磨菇氣が位置する地方では、水位の上昇こそ観測されたものの、とりたててその被害状況を記録したものを見当たらない。

こうした事実は小説にも反映されており、物語はまず、作者の分身とおぼしき「老阿」を含む四人が、水路で村に向かう途中で船から眺める川の様子を描く。

汽船は嫩江より西へ、雅魯河の水面上を走っている。ちょうど水位が急上昇し、今の雅魯河は果てしなくて、濃い水気と広範

囲の波が地平線を目指した。波が高く、もはや一面、海である。「俺たちは今、成吉思汗の大草原の上を走ってるんだぞ。まともな航路だとも思ったか？」と船長が言った⁽¹⁰⁾。

このように、被災地ほどではないにせよ、磨菇氣周辺では、大草原が丸ごと水の下に沈んでしまうぐらいには、洪水の危機が迫っていることが示される。その上で、語り手は、この村の様子と洪水の危険性について、以下のような描写を続ける。

磨菇氣についた。土堤の上は男ばかり。洪水を防ぐ堤防をなおしている。水が物凄い勢いで増え、堤防の最高位置まで1メートルちょっと。少しでも気を抜いたら、磨菇氣ごと水の底だ。更に今夜は、大雨だと予報されている。生か死か、今夜で決まるらしい。老邱は言った。磨菇氣は小島のようにあたりいったい全部が水だ。そしてこうも言った。島というのは正確じゃないな、お盆、盆地だ。周囲を高い堤防に囲まれて、磨菇氣はまさに盆の底だ。盆底村と呼べばいいのにな⁽¹¹⁾。

文章自体はコミカルに進むが、その実、作中の村は存亡の危機にさらされている。そして、「盆底村」という言葉からは、磨菇氣村の「盆地」という地形が、今回に限らず、過去や未来、この地に洪水が起きる度に、村が水没の危険に晒される原因となっていることも示唆される。

ただし、本作において、水位の上昇や村人たちが堤防を強化するなど、洪水が迫りくる間接的な描写はあるものの、洪水そのものが描写されることはない。「洪水」という要素は、物語

の背景として大きな役割を果たすと同時に、作中の四人組を磨菇氣に誘う役割をも担っており、村を訪れた四人は、同地での食事や狩猟、そして犬を食べるといった、物語の核となる出来事を、可能性としての洪水に導かれつつ体験するのだった。

名高い狩人の二哥がさばいた犬は、老邱みずからが料理して全員に振る舞った。その後、一行は料理の余韻に浸りつつも、夜の大雨で村の堤防が崩れないことを祈り、物語は幕となる。「今回の旅は、老邱の言葉を借りれば、三つの目標がある——魚釣り、ハント、犬殺しだ」⁽¹²⁾というのは物語冒頭の言葉だが、こうした「目標」は、洪水の危機がその背景にあるからこそ生きてくる。「此度の行動、老邱が船長に話すとすぐに了承された。船長は『ちょうどいいや。俺も困ってた。これで万が一磨菇氣に洪水がきたら、そこから何人か助け出せる』と言った」⁽¹³⁾という描写からも分かるとおり、洪水という非常事態は、村の日常への接近を拒むものというよりも、むしろその接近を促す役割を与えられているのである。

このように考えてみると、「磨菇氣」において主眼とされているのは、洪水が来る危険性に脅かされながらも営まれる、都市とは異なる磨菇氣ならではの日常生活であった。ことに「食」の描写に関しては、中国東北地方の魅力を全国に届けることを創作目的の一つとする阿成作品において、細かな配慮がなされている。阿成自身、自作における「食べる描写」については、とあるインタビューで以下のように語っている。

気づけば、私たち人間の多くは、食べる
ことばかりを考えて日々を生活している。う
まい食べ物を前にして、彼らは心からの、

とめどない愉悦と興奮にとりつかれている。私はそれを無視することが出来ないし、なるべくそれを表現したいと思う。実のところ、食というのは、つかの間の幸福に過ぎないのだろう。だが、何千年もの間、人々を魅了する光を放ってきたのだ⁽¹⁴⁾。

こうした姿勢を評価して、南京師範大学教授の何言宏は、阿成作品集『胡天 胡地 胡騷』に寄せて、「その土地の人々の生活を表す風俗画を描く才能がずば抜けている。特に、『磨菇氣』で一行が狗肉への執着をみせたり、二哥の犬を殺したりする場面、さらには、老邱の暴食っぷりなどは、東北の味というものを鮮烈に表している」と述べている⁽¹⁵⁾。ただし、本作において阿成は、四人組の一人である老費の口を借りて、「狼よ、人のように墮落しないでくれ」という言葉を四度繰り返している。一行が猟銃でカモメを打ち落とした時や、犬料理を食べる時に発せられるこの言葉は、自分たちをも含む都会人への戒めでもあった。磨菇氣を訪れた一行は、村人の立場から見れば、洪水が来るかもしれないという緊急時にやって来たはた迷惑な「お偉いさん」だったかもしれない。最終的に、「犬を殺す」という一行の最終目的は、二哥が自らの飼い犬を殺すことで達成された、その結末こそが、農村に訪れた都会人の「強気」であり、阿成が読者に伝えようとした「人の墮落」だろう。だが一方で、そうした一行に振り回されながらも、一行の案内役である村の若き女性作家が時おり見せるかわいらしい振る舞いや、飼い犬を手際よく殺して捌く二哥の冷徹さもまた、阿成が読者に伝えようとした「東北の味」であった。

Ⅲ 洪水が去った直後の「川上拾遺」

1998年に発表された「川上拾遺」は、その成り立ちからして前作と異なっている。どういふことかという、同作は、阿成個人の作品集ではなく、『'98 哈爾濱抗洪実録 英雄譜 文学卷（'98 ハルビン抗洪実録 英雄譜 文学卷）』という、1998年に黒竜江省ハルビン市を襲った大洪水の期間中に編まれた文学作品集に収録されたのである。この作品集には、短編小説三編、散文五編、百十二編の詩が収録されており、阿成の「川上拾遺」は、その巻頭に配置されていた。

「川上拾遺」には、「宣泄（腹いせ）」、「凭吊（弔い）」、「見習記者（記者見習い）」という三つの独立したエピソードが存在し、それぞれ異なった側面から洪水と被災者を描く。まず、「宣泄」では、「磨菇気」で登場していた老阿と老邱との通話記録を通し、かつての磨菇気における体験を振り返りつつ、今は既に村が水没してしまったことや、住処を奪われ途方にくれた村人たちが腹いせとして、川に向かって唾や鼻水を吐き入れる様子が描かれた。次に、「凭吊」では、洪水が磨菇気に到着する直前、現地の住人に移転を要求する共産党幹部と、それを頑なに拒む一部の人間たちとの諍いが描かれた。そして最後に、「見習記者」では、洪水の被災地の近くに偶然い合わせた記者見習いが、上司の指示でスクープ写真を撮りに被災地に赴くも、最後は逃げ遅れて命を落とすという物語が語られる。

「川上拾遺」を単独の作品として見れば、三つのエピソードはそれぞれ、非被災者側、被災者側、救援活動をする側という、三つの側面から洪水の様子を全面的に描き、洪水という災難

を描く文学の役割を十分に果たしたと言えるだろう。だが、磨菇気という場所を中心に、「磨菇気」、「宣泄」、「凭吊」を同系列の作品と見なした場合、「宣泄」と「凭吊」は、互いに大きく隔たった物語であることが分かる。というのも、「宣泄」は、「磨菇気」の数年後に発表された後日譚として、1991年と1998年の二作品の橋渡しの役割を担っているからである。「宣泄」では、作者の分身であるはずの老阿が、なぜか磨菇気のことを忘れてしまっており、老邱に幾度となくせつつかれることで、ようやく鎮での出来事を思い出すという構成になっているのだ。ここでは、作者が老邱の口を借りて、第一作の読者の記憶を呼び起こそうとしているのだとの解釈も成り立つ。

これに対して、「凭吊」は、「磨菇気」と「宣泄」の世界にもとづいた、完全なる虚構であり、作者の怒りそのものが主題となっている。1991年の時点ですでに懸念されていた、洪水による村の水没という危険予測が現実のものとなったとき、作中人物のモデルとなった現実の村人たちも命を落とした。その事実、阿成は悲しみ、そして怒りを覚えたのであろう。実際、「凭吊」では、従来の阿成作品であまり見られない、作家であることへの無力感を想起させる自虐的描写や、中国政府に対する嫌味や反語といったものが散見される。「凭吊」の冒頭に展開された、エッセイのような語りをみてみよう。

洪水が、いくつもの都市と町を経て、昼も夜も留まることを知らずに嫩江になだれ込んでいき、合流し、凄まじい勢いで松花江に向かってきた。1998年秋、8月に起きた150年以来の特大洪水が、このように形成された。無論、原因はほかにもいくつかある。かつて私は、「蟒珠河」や「林区筆

記」に書いた——大、小興安嶺はもう「ハゲ興安嶺」になりつつある、どうかもうこれ以上樹を切らないでくれ、これ以上切ったらまずいことになるぞ、と。だがしかし、一介の物書きの言うことなぞ、誰が聞く耳を持つだろう？ 思うに、黒龍江の林区がここまで切られたことに、全民族は反省すべきだ！ 今度、お上の指令が下された。樹を切ってはいけない、と。よし！ 功德無量！ この決断に深い一礼を捧げたい⁽¹⁶⁾。

このように、阿成は作家であるの自身の無力を嘆き、大洪水の原因となった森林伐採による土壌流失を嘆き、手遅れとなった政府の森林伐採禁止令を、嫌味に満ちた口調で熱く語る。ここから阿成は、政府幹部と村人との、互いに対する不信任が生んだ悲劇を語る。まず、政府側の人間から見て無知であるはずの村人代表・二哥は、実は現地人としての経験から⁽¹⁷⁾、洪水が来ることを事前に知っていたのだが、政府幹部に報告したところで相手にはされないだろうと端から諦めていた。だが、二哥は、1991年の洪水と1998年の洪水の状況の違いを知らなかった。その違いとは、森林伐採が起因する土壌流失によって、1991年には防げた洪水も、1998年においてはもはや防げないということである。その上で、政府が下した移転の命令にも不信任を抱き、移転を拒み、最終的に命をも落としてしまう。

こうした「凭吊」の物語を読むうえで肝心なことは、この物語自体が完全なるフィクションであるということだ。そして、同作がフィクションであるにもかかわらず、そのリアリティは、「磨菇気」と「宣泄」という二つの写実的な物語と連動することによって効果的に醸成され、「現実には起きていないけれど、いつどこで起

きてもおかしくない」という奇妙な感覚を読者に与えることに成功しているのである。

さらに、「見習記者」において描かれたのは、主人公が被災地にて被災者を助けるために命を落としたという、いわば英雄と犠牲の物語であった。実のところ、1998年の洪水を巡って生まれた新聞記事や文学作品においては、こうした類の物語が主流となっていた。具体的に言えば、『'98 哈爾濱抗洪実録 英雄譜 文学巻』に収録された百十二編の詩のうち、洪水に果敢に立ち向かう中国人民解放军兵士たちの勇姿を褒め讃える詩は六十六編にも上る。阿成もまた、こうした風潮に従うかのように、英雄と犠牲の物語を「川上拾遺」の最後に配置するのだが、「磨菇気」「宣泄」「凭吊」というように物語を読み継いでいったとき、その英雄譚が実は、政府の顔色をうかがう風潮そのものに対する皮肉であったことが明らかになる。つまり、「川上拾遺」とは、表面的には洪水の被災地となった場所を三つの側面から描いた「災難文学」⁽¹⁸⁾であるのだが、他方では、1998年の大洪水の背後にある中国政府に対する告発の書でもあったのだ。

IV 新時代としての「後磨菇気時代」

「後磨菇気時代」は、「磨菇気」から十五年後の物語である。一行は十五年後に再び磨菇気鎮を訪れ、個々人の十五年間を振り返りつつ、洪水が去り、変わり果てた鎮とそこで暮らす人々の様子を描いた。全編十八にも及ぶエピソードの中、「磨菇気」を想起させる描写や、1998年洪水のつめ跡についての描写が散りばめられている。

まず、「二哥的故事（二哥の物語）」というエ

ピソードでは、「川上拾遺」で命を落とした二哥が、思い出話として登場する。彼は、「磨菇気」では犬を手際よく捌き、「川上拾遺」では真っ先に移転を拒み、理屈と屁理屈を並べたてつつ共産党幹部と渡り合った村人の代表である。この男が象徴するのは、かつての磨菇気村にはあったものの、今となっては失われてしまった、純朴でありながらも荒々しい気風であろう。「磨菇気」と「川上拾遺」において異様な存在感を発揮していた二哥であったが、本作では、老邱の物語の脇役としてのみ登場し、その存在感が薄められる。こうしたことにも、古き良き磨菇気の消失を嘆く阿成の思いが感じられる。

次に、エピソード「嫩江的故事（嫩江の物語）」では、「磨菇気」時代の嫩江の様子や、河で釣った魚を食す場面が回想された後、現在の川の様子が次のように描かれる。

すると老邱は、思わず感慨深そうに言った。

「今や嫩江の水も汚染されてしまって、もう飲めやしない。魚ももう食えない。昔は平気だったのに」

老賈はつまらなさそうに言った。

「ポストモンゴルキ時代という呼び名も、伊達ではないな」⁽¹⁹⁾

このように、阿成は本作ではじめて「ポストモンゴルキ」に対する想いを吐露するのだが、このとき、「後（ポスト）」という表現が皮肉な響きを持っていることは注目に値する。というのも、「川上拾遺」において阿成は、水没した磨菇気の未来をこんなふうに予測していたからだ。

私は聞いた、「村人たちはまた戻れるだろうか？」と。

「厳しいだろうな。あそこはあまりに凹んでいて、新しい場所で建て直すしかない。家の再建ってやつだ」と老邱が答える。

「先祖代々の家を失って、皆はきっと集まって川沿いで泣くんだろうな」と私は言った⁽²⁰⁾。

このように、前作において「私」は、水没した磨菇気村の再建が困難であることを予期していたのだが、これに対して、「後磨菇気時代」のエピソード「磨菇気的故事（磨菇気の物語）」では、洪水後にまったくの新しい素材で再建されてしまった村の家々の姿に胸を締め付けられる「私」がいるのだった。

目の前の磨菇気は昔の影すら残されていない。あの年に嫩江に大洪水が起き、村の家が全て流され、崩れた。今私たちが見ているのは全て後で立て直したレンガ屋だ。レンガ屋はもちろん良いものだ。が、アジビハウスが持つ独特な「味」が、ついに消えてしまった⁽²¹⁾。

ちなみに、ここで言及される「あの年の洪水」とは、1991年のものではなく、1998年の「九八大洪水」を指す。当時の洪水に関する報告書である「1998 防凌防汛大事記」には、「扎蘭屯地域水流量は2280 m³/sに達し、1957年に起こった史上最大の洪水を超えた。扎蘭屯市の3.4万人が水に囲まれ、扎蘭屯全域の十五の村と鎮の交通が中断、六つ鎮が停電した」⁽²²⁾との記録が残されている。このような大洪水によって流されてしまった村は、けれども、思いがけず同じ地域で再建を成し得たのだが、そこ

からはすでに、「磨菇気」に描かれたような、この土地ならではの「味」が永久に姿を消してしまっていたのだ。阿成はさらに、「老小家の故事（老小家の物語）」と題されたエピソードにおいても、1998年の洪水で命を落とした人々についての記述を行なっている。

二十分後、車は磨菇気の老小の家について。聞くと、ここはもう磨菇気後村になったそうだ。

老玄は言った。

「ポストモンゴルキ時代と息ぴったりだな」。

老邱も感慨深そうに言った。

「昔の奴らみんな死んじゃってさ。クソツレ！（中略）今更何言っても無駄だ。彼らは今のような良い生活と行き違いになったな」。

「つまらないな」と老賈は言った⁽²³⁾。

引用中にある「良い生活」とは、もちろん経済的に恵まれた暮らしのことを指すのだが、これを可能にしたのは、国からの支援金であった。というのも、本論のはじめにも述べたとおり、現実の出来事として、磨菇気鎮の党委員会幹部である呉玉臣は、2001年初頭、国家の政策が発令されるのに先んじて、鎮政府としての「退耕還林」優遇政策を実施したのである。そして、2003年には、鎮全体の「退耕還林」を完了させた。その後、国家から1000万元に及ぶ支援金を獲得し、結果、鎮全体に「良い生活」が広がったのだ⁽²⁴⁾。

本作において阿成は、「磨菇気」での出来事にたびたび言及し、読者にかつての記憶を呼び起こすよう促す。その一方で、「川上拾遺」というタイトルには一切触れず、その存在につい

ても遠回しに言及するばかりである。ここに見られるのは、「川上拾遺」という作品に対する、作者自身の肯定も否定もできない態度であり、かつての自身の「怒り」に対する阿成の現代作家としての葛藤であろう。また、「後磨菇気時代」において、老賈は、終始、冷眼傍観とした姿勢で、「没意思（つまらない）」という言葉をも二十回以上も口にしてみせるのだが、その対象となるのは、再建した磨菇気鎮とそこで暮らす人々に留まらず、変わり果てたこの「ポストモンゴルキ時代」そのものでもあるのだろう。事実、一行は鎮に一週間ほど滞在する予定だったところを、苦しい言い訳を口にしなが、たったの一日も滞在せずに帰路についたのである。表向きの理由として、村人たちは皆農作で忙しいため、あまり一行をもてなす暇がないという描写もあるが、実際の所、十五年前に比べて、都会人、知識人、幹部といった肩書きを持つ一行の影響力がかなり薄れたこともあるだろう。

磨菇気鎮という場所は、政府や地方紙が喧伝するように確かに裕福になりはしたが、それと同時に、阿成にとってはあまりに「没意思」なものになってしまった。最後のエピソードとなる「落空的故事（空振りの物語）」では、鎮の中の友人・老小の妻がブランド品への執着を見せたり、一行が鎮を出るために依頼した車の運転手が相場以上の報酬を要求したりといった、嘗ての純朴さを失った現地人の姿が描かれるのだが、「磨菇気」にて繰り返し書かれた「狼よ、人のように墮落しないでくれ」という言葉は、もはや誰の口からも発せられない。かくして、阿成が得意とした東北地方の風俗描写は、洪水と「退耕還林」以後の同地において、やはり「没意思」なものとなってしまわざるを得ないのだった。

結びにかえて

2000年代より中国政府が推進してきた「退耕還林」とそれを中心とした「生態建設事業」は、公式には、「環境破壊が原因で困窮を極めた地域を新政策によって再興させる」という国家事業であったが、阿成文学が書き継いできたのは、「磨菇気鎮を襲った洪水の原因は地域の環境破壊であり、その破壊活動を黙認してきた政府は、あろうとことか優遇政策の実施によって鎮の良き気風すらも破壊してしまった」という物語であった。中国政府による農村建設が、「復興」という名の「隠蔽」に他ならないと見抜く阿成は、反対に、もしも磨菇気鎮が洪水に押し流されなかったら、磨菇気が経済的繁栄を謳歌することはなかったのではないかと訝しむ。地域文学の創作者たる阿成の視点を借りて現代中国の環境政策を見直すと、私たちは、政府主導の「生態建設事業」が、国土の大半を占める農地の緑化と国民生活の向上を約束するものである反面、街並みや生活の過度な均一化を促すものであることを痛感するのだ。

ちなみに、2008年以降の中国は、「後災難時代（ポスト災難時代）」と呼ばれるが、本論の最後に扱った「後磨菇気時代」というタイトルも、多分にこの呼び名を意識したものであった。「ポストモンゴルキ時代ってなんだ、博士論文でもあるまいし、つまらない」とは、作品冒頭に発せられた言葉だが⁽²⁵⁾、ここにも阿成特有の、時代の潮流に対する皮肉めいた対峙の仕方を見てとることができる。2008年に発生した「汶川大地震」以降、中国では、環境に対する政府の態度、新聞報道の方針、そして国民の意識が大きく変化した。中国西南交通大学の人文

学者・支宇は、この地震をきっかけに中国の災難文学が「華麗なる転身」を果たしたと指摘し⁽²⁶⁾、中国災難文学の第一人者である范藻もまた、2010年発表の論文において、この年以後を「ポスト災難時代」と呼んだ⁽²⁷⁾。以後、建国初期から中国の災難文学を支配し続けてきた「革命の物語倫理」が崩壊し、「人間性をめぐる物語倫理」が主流となり始めたのだが、阿成自身は、そうした風潮にどちらかというと冷笑的であり、「没意思」と感じていたふしがある。というのも、軍人や政府幹部が人助けをするといった英雄物語ではなく、被災地における一般人の感動エピソードを評価する2008年以後の風潮は⁽²⁸⁾、むしろ洪水以前の、1993年の時点で既に「磨菇気」を語っていた頃の阿成作品の特徴であったからである。それを2008年にもなってあたかも世紀の大発見であるかのように「以人為本」を連呼し、沸き上がる中国災難文学の様子を「没意思」と感じた阿成は、「後磨菇気時代」の中で「老賈」の口を借り、執拗に、そのことを子供っぽく連呼したのだろう。こうしたことを確認するにつけ、私たちは今こそ、阿成文学の歩んできた道のりを辿りなおさないといけないのかもしれない。なぜなら、復興という名の隠蔽工作が生み落とした「美しい安居の村」の歴史は、公式の記録にではなく、非公式なかたちで作家が書き継いだ「取るに足らない人物たち」の物語の中にこそ息づいているからだ。

注)

- (1)「磨菇気」は、漢語とエウエンキ語の混合語であり、その意味は「キノコある場所」である。また、「モンゴルキ」という発音については、昔「蒙古基」という名の遊牧民がこの地域で最初に放牧したため、鎮ができた後、その人の名前がそのまま鎮の名前となり、「蒙古基」も徐々にそれと発音の近い「磨菇気」となったといわれる。本論では、「蒙古基」の発音を

- 取って「磨菇気」を「モンゴルキ」と呼ぶ。
- (2) 〔杨红 赵登亮「呼伦贝尔市再添 16 个国家级生态乡镇」,『呼伦贝尔日报』,2013 年 7 月 9 日〔6 頁〕〕。
 - (3) 王立索 谢桂霞「生态富民的好榜样—记扎兰屯市磨菇气镇党委书记吴玉臣」『实践 (党的教育版)』06 期、2004 年 6 月、18 頁。
 - (4) 纪明国「扎兰屯市磨菇气镇野马河村获评“全国美丽宜居村庄”」『内蒙古林业』第三期、2017 年 3 月、47 頁。
 - (5) 磨菇気村は、磨菇気鎮所轄の「鎮郷結合区」であり、その所在も鎮の内部である。阿成作品においては「磨菇気」とだけ書かれることが多いが、内容から判断すると、村を指している場合が多い。
 - (6) 日本語に訳された阿成の中編小説『カラス』は、雑誌「中国現代文学」2008 年第 2 号に掲載。
 - (7) 郭嘉「阿成:城市平民的代言人」『职大学报』04 期、2006 年 12 月、106 頁。
 - (8) 阿成『哈尔滨故事』、昆仑出版社、2004 年、3 頁。
 - (9) 张素琴 任振球 李松勤「江淮特大洪水与引潮力异常」『气象』第 18 卷 09 期、1992 年 9 月、21 頁。
 - (10) 阿成「磨菇気」『胡天胡地胡骚』、北京出版社、1999 年、107 頁。
 - (11) 前掲書、112 頁。
 - (12) 前掲書、111 頁。
 - (13) 前掲書、108 頁。
 - (14) 张赉 阿成「阿成访谈录」『小说评论』06 期、2006 年 6 月、31 頁。
 - (15) 何言宏「文化北国的精神与生存」『胡天胡地胡骚』、北京出版社、1999 年、2 頁。
 - (16) 阿成「川上拾遺」『'98 哈尔滨抗洪实录 英雄谱 文学卷』哈尔滨出版社、1998 年、8 頁。
 - (17) 作中では、現地人の間に「春天河见底、秋天水上房 (春に川底、秋に屋上)」という古い言葉が伝わっている。これは、「春に見た河の水位が低いほど、秋に洪水が起きる可能性が高い」ということを意味する。
 - (18) 本論で使用する「災難文学」という言葉は、日本語に直訳すると「災害文学」になるはずだが、中国では自然災害とそれに伴う飢饉や疫病をテーマにした文学を「災難文学」という。例えば、中国で「三年自然災害」と呼ばれる 1959 年から 1961 年までの三年間で、飢饉により死亡した人数は 3000 万人～8000 万人とされており、その原因の一部は悪天候による不作であったものの、当時の中国政府の政策ミスの方が主な原因とされている。「三年自然災害」は自然災害であると同時に、人為的な災難でもあった。その時期の様子を描く作品もまた「災難文学」として分類されている。よって本論では「災難文学」を使う。
 - (19) 阿成「后磨菇气时代」『西部』19 期、2011 年 10 月、56 頁。
 - (20) 阿成「川上拾遺」『'98 哈尔滨抗洪实录 英雄谱 文学卷』哈尔滨出版社、1998 年、7 頁。
 - (21) 阿成「后磨菇气时代」『西部』19 期、2011 年 10 月、57 頁。
 - (22) 闫新光「1998 年防凌防汛大事记」『内蒙古水利』第二期、1999 年 4 月、48 頁。
 - (23) 阿成「后磨菇气时代」『西部』19 期、2011 年 10 月、58 頁。
 - (24) 王立索 谢桂霞「生态富民的好榜样—记扎兰屯市磨菇气镇党委书记吴玉臣」『实践 (党的教育版)』06 期、2004 年 6 月、18 頁。
 - (25) 阿成「后磨菇气时代」『西部』19 期、2011 年 10 月、43 頁。
 - (26) 支宇「后形而上学时代的灾难艺术」『社会科学研究』02 号、2011 年 2 月、21 頁。
 - (27) 范藻「地震文学, 敢问路在何方?」『天府新论』03 期、2010 年 3 月、131 頁。
 - (28) 2008 年の「汶川大地震」が中国の災難文学に与えた影響の詳細については、拙論「ハルビン大洪水の後で」(文学・環境学会『文学と環境』第 22 号、43-50 頁)を参照のこと。

